談話
書取

三吉艾編輯

作文初步

二編

全

特33
690

江阪強近　閲
三吉　艾編輯

談話書取 作文初歩 全

貳編

京都書林　花説堂
文正堂

凡例

一コノ編ハ畧綴文ノ体ヲ解スル児童ノ為ニ編ス故ニ初編ニ於テ充分習熟シ而后コノ編ニ従事スヘシ

一初編ハ讀本連語圖等ノ中ニ就キ最モ解シ易キ文字ヲ用井務テ平易ナル談話ヲ輯メタレ𪜈コノ編ハ字義談意并ニ稍高尚ナリコレ綴文法ニ一歩ヲ進メ兼テ普通ノ熟字ヲモ知シメンカ為ナリ

一談話中余カ生國ノ方言ナキヲ保セス看者看ルニ隨ヒ幸ニ之ヲ訂セヨ

編者識

江陵強近閲
三吉 艾編輯 貳編

談話書取 作文初步 全

京都書林 花説堂
文正堂

凡例

一コノ編ハ畧綴文ノ体ヲ解スル児童ノ為ニ編ス故ニ初編ニ於テ充分習熟シ而后コノ編ニ従事スヘシ

一初編ハ讀本連語圖等ノ中ニ就キ最モ解シ易キ文字ヲ用井弩テ平易ナル談話ヲ輯メタレ𪜈コノ編ハ字義談意共ニ稍高尚ナリコレ綴文法ニ一歩ヲ進メ兼テ普通ノ熟字ヲモ知シメンカ為ナリ

一談話中余カ生國ノ方言ナキヲ保セス看者看ルニ隨ヒ幸ニ之ヲ訂セヨ

編者識

明治十四年版權所有

談話書取作文初步二編

江阪強近閲　　三吉　艾編輯

談話之部

(一)

がくとんとして、そまをおこるひませ祢で、うつはをこしらへて、そまをづうとぬふるとのでがくとんせぬうふが、まーでおざりまする。おこるふて、ゑそこないのあるのをうつとをつうふて、そゑ祢させふるとのでゑる城せで、やとう、とのとをうこ、すうまする。

(二)

ゑるいくせのあるとのとこどものうちこゑ城ーませ祢バ、とーふるふつまて、そのくせも、やとり、たゑてきます。

たとへてこまを、めだちのときまがりてゐる木でそのふとるすくこまをまろせておけば、ふとるにつれてそのまがりもいよいよおほきくなるふるものでおざりまする。

(三)

ともしびのひかりをあらるくハおざりまするゆゑども、かるのひのかぜにきえぬふハかよびませぬひともあるときかんがへずむやみにぶんのぶやふぞのことよ、ぶまんをすると、かへつて、へたのひとにおとることがおざりまする。

(四)

やまのこらすがらしのことをだしてもおほくのとりて、こゑをおをれませぬいへにかふぶさがとらのかはとき

(五)

てもおほくのけをのここゑををけませぬとりやけらものでさへそのとをりでおざりまする。まして、よろぎのものふをぐゑをひとでいろいろはべのうさちでこゑをだまをふとおもふてもどふしてできまえやよぞ。

りんぎよハそのいろがうつくしふおざりましてもくはゑをませぬくちをあふよいつもよいろはをしているものをそのうはむきをはつめいらしくてもうつくりとつきのはゑをませぬそのそをいるひとをうけることがもくなくないうちでおざりまする。

(六)

をごとをしてをそをなるひのなきをふふをふとおもひ

なさるならバ、まづ、ゑぶとを、とりうくらぬうちに、ぞぶん
のちからで、できるゝ、できぬゝと、ぞうぶんを、かんがへる
がよろしゝ。もしてゐあまることゝ、おもひなさるゝふバ、た
じめから、こゝをとせぬがよろしゝ。たんとで、やめるきづゝひ
がゞ、ござりまする。

(七)

えゝのひくいのを、みて、こゝを、ひるどゝ、こづの、あさいの
を、とて、こゝを、かろくおりふハ、あるくゝに、おゝろとを
ちゐぬものでおざりまする。ことの、ゑやをいのを、みて、こ
ゝを、ゆゝがせふ、まるものゝ、このゝちゝを、なにとも、お
もはぬものでおざりまする

(八)

とぶとりを、にげゝあとを、ねのかげを、とめて、おきませ
ぬゝが、まるゝづを、きられても、そのあとを、のゝこしませぬ。
を、ゐて、おぎをゝりゝことを、いくたび、くやゝても、きつと、ま
にあいませぬ。そゝゆゑ、いつまでも、おゝろを、つけてから
ず、さつぱりと、そのおりひを、たちゝり、ひらためて、あとの
ことを、とゝかるゞがよろしゝ。

(九)

こづを、やゝらゝるものでおざりまする。けゝだもを、むさ
ゝ、ゆへ、だゝたまりて、こゐりと、ゐりまする。しゝくろゞ、ゐハ、
ゐゝいものでござりまする。あゝゆゝまりゝ。あゝ
バ、とろけて、ゆゝるりまにゐる。そゝゆゑ、やゝらゝるひとで

もうたいひとでもかはつてことよあひまするとさよあるそたつ孫ぐどふらふみいはせぬことがけうまるる

（十）

ひとをあつうふまたはふましもぎるうまいつ接ていい孫いもぎるわふがよろしていい孫いもぎるめたたぐだぶん

のからだをつうふことがおほいだりでけうましもぎ

ると ひとものうらみをとるることがおほくぎざりまもる

（十一）

らいた孫がけりてもつちらいやしをひませ孫でおめや

はをとりいせらせませぎをいが本がけりてもけりたり

けづりたりせ孫ではしらやうつだりふ接をすくらせます

ぬうまきつきがひとにもぐまてぐまておしこいものでもかく

（十二）

ちんをたまませ孫だやたりことをとりをだきてぐらをけ

らはもことをできにくふぎざりまもる

ぎぶんのたそたるひとうましくおりふてこまをさくぐ

よろしひとのたそこをひはさしひらへておまをいひな

をるをうふまをるときはぎぶんのをるとはおひく

たぐしくすりてひとのにくしくをうるおとはをいで

ぎざりまもやふ

（十三）

ひうげとふものはぜにでうはまぎいおふでをとめら

まぬこのうををきたいせつのたらでぎざりまして天

らいちうふまおはくのひとにけてぐふてくださまたを

のでござりまする。そをゆゑ。こづゝれ。あいだも。むだふく
らさず。ゝたく。とちて。とりそをしませ。孫だ。きつと。びんぼ
ふよ。おちこむ。ちんぴゝハ。おぎりませぬ

（四）

ちいことと。ちやふがい。ちてもまざるいふふハ。ずりま
せぬ。るいことハ。いちふち。まると。とちや。ゆまりが。ゆり
まする。そをゆゑ。ふいことハ。ゝさるら。孫だ。ちをまませず。と
るいことと。いちど。ちままると。ぢきに。ちをまるとのでおざ
りまする。

（五）

おほざけを。のむハ。ゝらざのやしるひよ。さまたげよ。する
ぞゝりでなく。うちハ。ゝろのかりひと。ぞだし。そとと。お

こをひのさまを。ないふよさしハ。ちをぞ。ぐしたふ。ずりま
すると。ともだちや。ちんるいふまで。をまたぎを。とうけるこ
とが。おぎりまする。むゝしのひとが。ゐを。つけて。ちゝがひ
ぐそりといふハ。そのちづで。おぎりまする。そをゆゑだし
ゐこのふいてゆついひとハ。たいてゝ。こををのむことと。
をちをませぬ。

（十六）

ことわざふ。くもまで。どぐいてゐる。いかでも。いとをさを
ハ。そぐに。おちるといひまする。ちをハ。ひとのおゝげでふ
いはまを。とるをの〳〵たと〳〵で。ひとの。こさげる。ことで
おざりまする。たをもゝ。ろゞけで。ぢぶんゝらの。ぼるを

べのことばらにせいをだして、ひとのいとをだらうよせぬふよ、ちるさま。

(十七) ひとゞ、あゞふどくをものを、くひらけまるをおちらに、ちりなゞふそををつゝてきかをぬハ、ひとのるさけでゞざりませぬ、ひとゞぶんハ、ちるとのおきておちゞふとをだちふゞまるけるのをおちらにきゞつゝて、ねるゞふそををつゝてきうをぬハ、やちりひとのるはけでゞざりませぬ。

(十八) ちよをつハそをまをつてことのをじこちをちりちるをひらくをけのをものでゞざりまけるゆゑせんせいをゞふ

ふよだいじゝかけ祢ゞすりませぬそをゆゑだしいれ、ゆけをちるなどのをちをふを、祢んをいをて、とりあつうひゝゞしたりやぶりたりまることゞうてハをゞませぬ。

(十九) たつといをものもひとでおゞりまるゝ祢をちもひとでおゞりまるゝちてるをとひつてそのをぶんよるらをぬを、つゝけゞなゞゆうまゝやふゞたゞゞおさるいとをちらゞくをんゝせいだしてそのちるゝをつをへををバよろしふおゞりまする。

(二十) なりうをちゞひとのゝうゝおいをとおろうをとををけにくいことハちふゞてるをとて、ホのよゝゆゝをとちうけ。

にくいくらふなものでございますがりぎりろなくう
そのないむとえそのうちハうへつて、ゆりのまくのと
のでありまして、うはべのらふまをとおもふものえだ
いて、うらくしてきんせつのないものでおぎります
るくらくらんぎへ祝だ、ありません。

（二十一）

ものやはうについたふつのようつきなひまをる
えさけとそくらふるものでおちらとろこだしまし
てもえまへよハおはるんぎをひきおあすでおぎりまえ
やふものぶたいはがみぎく祝のるいひとおつきなひま
まるくらすることのむらふるものでころとろこだを

ることハはりませぬともぢきふ拵のおろしぎみへるで、
ぎりまるやふ。

（二十二）

へまぐちやまどまそきまぎなくぎやふまいがうたくし
てそのらふどんぎたびしらきだたとひるぢるのなる。
ぬもびとぎいりおまふとおそふてもできませぬふこ
とにえくぎりぎなくまることまよたまりぎなりてうらだ
のちちうたぎたぐしらきでるをこひものぎおても。

（二十三）

こきをひきへきらふぎぎりません。
をむらんとむやくちやふとえくあんとなるさふどいひ
とつでもよのるうになくてるふぬものでなりまして。

なにしゐはきおれがるいおもといのてちちがはりまんや
ふぞ　はきゆへそのちろだてとうへぎめへ〳〵そのそちち
まんのとざふせいだもがちろろ〳〵こまがとりもなはさ
ぎこそふ〳〵つゃへいへをひきなまし〳〵てがこととりた
てるのこちでおざりまそる。

（二十四）

ちんだんがおはいもくないハはへのかはきなとちさい
のとよハかこちりませぬちろのかはいもくないハちゃ
らのつよいをはいふハちりませぬそまゆへいへがかは
きくちゃらがつよくてもぞんぶんちゃらたゃぶりひとのち
みへおしゐでるふなことをてハもこませぬちまい

ふハちはをちをちくことがはるでおざりまちやん

（二十五）

いちまいのかんぐでもぶじをなふふまとができまも
るしいつちんのせれひつでもせんことだハかくことが
できまるそまゆへやくにたつちなをのえこづちのも
のでもきつとそてくハもこませぬ。

（二十六）

ひとゝつきはふよいつちちふもはるとれハひと紙かこ
にもへいちつちよこはるくとれハぞんぶんをはのとにしを
きこことがはまでひとにおしはのこへちそこなひがはれ
ハぞんぶんふとりまはるこのちふよもまバそのつきはひ
ハなぎくつぐれいよゝちつりしてもきまで

ぬふはないでおぎりまちやう。

（二十九）

きく〳〵ハとちりちりあきくとちたいそのでおざまきりるちのしなぐ〳〵おぶんのみぶんとたのがちらでおることとくとうんぐくぎむやこふけだういしとふちとむぬまきるとぬたそのあくろざしをとげることがでぬぬかりてなくうへつてそまぬそこるふいとがいうまする。

（二十八）

ちふぬことをちりたふりをちるぬおぶんがおぶんをだまぬだうまでなくめのまくでひとをだまぬのでおざりまきるまいまがこるぢちのいるものくぐうちんがちくまずいつもひとにちんまふせふまぬとけでおざりまきる。そまゆくこうそめにもちふぬとがいうふぬとがいうふでいうていふちらぬとちなさまそまがおんふにちりたといふちのでおざりまする。

（二十九）

こちぬたのなもなさくさハこまをふこなぐらどをりて。なにともおりひまぬぬまどどをなぐさきまくたならぬこまぬらけてとをりそのうへめをつけぬものをござりまぬいなるにそぐちていつもひとにこちぐらまてあるものでもがくちんがでぬのぐりちちぐをぬらけまくたまハたまがこれをいのがめりやまはぬらの

がぶざりまちやふぞたまもせいだ〜なさま。

（三十）

ひとがいちどたくろざ〜をたてるならだやふきせんがかぜとおし〜ちりなることたちきりまもぐにもてこて。ゆるまぬがふにおなさまかぐをうろしなふたふ孫が。なが逆につまうかをれいるいて。そでまることのない。がうふよせぬふにおなされ

（三十一）

きつ孫はけそのくうちでのるぢ名がなつて。もおいもの。でおさりまたる。おうし。なぐらひとつけやさ孫づこのためふまなにおちいりてとふぐ。ひとの名らものにな。またたる。そまはけのこことでなくまひものをかしが

（三十二）

るうまれつさが。なるうらでおざりまたる。そまもの名ぢ名もなり。きまぐふも。なるそのでものこくひをあまりもきまするとおりく。はおなんぎをとびうもせるしとが。ござりまする。きをつけなさま。

（三十三）

いしぐぞこんうへて。屋にまをせられまするし。なまりけうさまりはうへてたしろいとせうままする。このなうにどふしてをしへて。うへうまぬひとがなりまえやふぞたぐ。そのおうたの。おとんどうれよかまるとうまはぬとにうるだかりでざりまたる。

（三十四）

はのをとがぐやぶまるへひとはまをしかくひも

のんこうけて、くひまをぬそ世ゆゑ、ぬるまで、まくらの、ゆ
ぢはひとをること、ハでさまをぬたもがちいさいひとハ、
ちらつと、むつう〜たことがあると、そぐうまそてちらそう
まをぬそ世ゆゑ、ぬるまで、おんゆいるこをとゆぢる
おとえ、でさまをぬむうしのひとのことばかきをハお
ゆさくゆちたいものとまいとまそのとぬまで、ぢぢら
まをんる。

三十四

おゆゆふけのいることえきつとおゆぞんがひすまんる。
そ世ゆゑひとの、いることにまくらひうんがへもなくきく
ろとうごかきでべちずにおぶんのそちまへのゆぶいとん。

三十五

はさらくがちろし、たとひおゆをふけおハゆふぬとて
もおゆぞんとをることハおぶざんとうまをせぬ。
うしのいるくのえおそくごぞうまするけ世でもそくこと
て、とぞまうまを孫だゆまいおハ、せんまのさきまでもゆ
きとぐくおとができまんるうまのをしるのをはやくご
ぞうまんるけ世どもひやくりゆるぬうちにだを世まん
るゆべてえごことをゆゆげるにをそろくとしておこ
たゆぬがうんぞんておざうまをるきつとをやふまゆゆ
げちふとおをひるをる。

三十六

にちまんのひうのびうくまるのでもくとやをりに

かくさるまとゞ。ゆうまるる。うぐこれもてのきらく
まるのでもちりやぼうりゃ。ふぼさることゞゆうすす。
そゑゆゑつゝことゞ。たゞしくまるとゞまつまぐこ。
ゆゑバ。たとひまこしのひゞくるゐれをしまと。
うることゞ。ゆうまして。ても。あかんでいまるにおる

三十七

びまゑゆふ。

えさやきに。ゑゑゞさきまるとゞぶんうら。ゑと。ゑぞと
もゞちやてふゞぞまでも。ゑたふて。きまずるそゑえば
ながにはひのゆる物と。ゑちてをるおらでござりまにる。
ひともやけり。そのとをりで。おくちんゞできゆうゞち

ゑゞ。ひらけまして。たならバ。ぶぶんにんかくして。もゐん
ひらふぞんゞ。どゝへも。きさいえて。ゐゑくのひとに。ゆゞめ
うやまは。ゑゐで。ござりまゐゆふ。そゑ。ゑゐ。ゑびふぞんを。
とらふと。おりはず。そのことゞらに。せゐゞすゞゐろし。
さゐこちゞ。ゐは。しくゐもゐゑゑだ。なんぎも。ひどうハ。ば
どうませぬ。なんぎゞ。むどくみけゑだ。そじわ。ゐゞゐふ
ぬふハ。ゐゐらぬで。おどうまゐゆふかくちんゞできゆうり。
ことになゑて。ゐる。ものゝ。ゐゐ。ゐハ。かたくして。うおか
そことの。できぬゑけたゑ。ゑいとさうら。むつうしさ
ことも。いやと。たりけだ。そくゐんぎと。こうへて。ゆちづに。

つとめとつてきたいこんぢうらでおざります。

三十九

こんざうひがおぐやうにおざりませ祢だうちのくにた。つまてゝふけうまにゐるぶんけなどがおうをくおざりませ祢だおんけがつまてたとろへまをる。いふことがをじこちこうなはぢすることがたでしくおざりませ祢バこゝろがとうどうくだまてきますをべてうちのこゞれるのえそとうらこぬそのハおざりませぬ。

四十

かゝすがくひとものをくはへてにぎるとうきぐをめいてにしてこまをゝくしまをる西名いつでもそのめいそとうはづしてこゝをおうれうすんとゝまると。いふことでおざりまをる。そのこゝろざしがさまだ。いつもひとのいふことにまふてたびくおぼとはうへるをのハちがふどのかゝすのをふにそのとくぶんをこゝをおうれひとものとうをのとなりまをるあくまんとおろうをことでハおざりませぬ。

四十一

おらだのたつしやこゝないのハうらぐのやをなひぐ西きとぐうぬうらでごぎうまをるちをのひらけぬとがくをんこゝせいだをこことがおろうぶんこゝないうらでおざりまをる。そをゆをおうらざれやをないとがくをんこゝせいだをおとえひとものなにうさきにきとつけ祢だをゝぬこと

でざりまする。

（四十二）

ちゝなるに子をとゝのいぎらぬおやハぎりませぬだで子でのるものぎこゝろくの。ゆきとぐうぬところぎのるでこそおうふまることぎのうまりる。そまゆへおやとうらまずいちづまぎぶんのたらぬとこ為をとうんぎへるぎよろしく子でのるものぎそのやくまくをぎうぶんまおまをまでおをにおのいぎらまることハきまつてのりまりる。

（四十三）

ちんだいをとちてゐるひとでのりながらごへたり。うゑたりしてゐるものをとうのぎしにまるん。おうぎうさの。おうふずをひとでのうりをながら。おぼまてゐるものをたすけぬとちがひませぬこのぶふをものをひとにふくまれるとがおほくてぎぶんのちのはせをいつまでもとつてゐることんできぬでのうりまりるふ。

（四十四）

やまいぬやおほうこがたけぐしくえげしいのえ。おほくのけものをおどをふハぎうぶんでのりまして。こまをなつりることんむつうしくぎざりまる。おほさなぞふがゆつたりとしてたとなしくいぬやぶさとねどおろをおなじくこそひとつのまるいことをもこゝろけぬふへおちびませぬそまゆえむとにつきのひまるふ

はるゝがけてぞふのうふふしてきつとやまいぬや。
おのうのまゝ孫をゐるをる。
まんどいことがいれだゝとにゐてつけとくのないこと
がいのまゝばひとにあてがひまいるこをハとりもをさず。
おぶんふまんどいおとをとめとくのないことをよむ
らやるとけでおざりまいるむうしのひとちつゝとこと
でにそらにむきてつぎきをそくハぶんよかねをよぶ
きとけでいるとやそうおれおとをいつゝきものでおざり
まゝやふ。

四十五

むさがりとることにゐりがなくだゝをくぶんをつうこ

四十六

とることにゐりをかきてとぢをもゐらびぎりをもうんがへ
ぞそなけぶしゐハひとれいきしにをもうまはぬをものがいり
まをるそををひとのかのでけをのくゐりとひまをるふのよ
ふなひとハきつとそのとくぶんをとつてをるごとハできま
せぞうへつておのきるふしいはせにかちこむおとがいるこを
のでだゝりまをるたそををくてくふぶざりまをるやふぞ。

四十七

やまくのがるにハいしゐだつしやできをるふがつよくして。
けはしゐところもおぢけぞいのぶないこちもかまはぞうへを
むゐてのがりやをまぬをのがいちぢんくやふそのいゝだきこ
ゆきつきまをるがくをんををるふハちゐろざしがをつ

りとしておろおろへちらばさむさをもかつさもかまはぢひるよるのとちなくせんだしてやめぬものがいちぢんさきにそのえごをとをつけるものができけるくだものをちをんて引カをかんがへだしのさてうちんのぶらくまるをんてふりどけんをかんがへだしてつむんのなげとうて蒸氣カをかんがへぐしたるどこなめのまくのでぢうれおとふついてとふぐしおるきるえごとをえぐしたのでぐどうまいるそをもたをもまいふちむきいうふものふついてぐうぶんふきをつけううくうてをらぬふふをなさを。

（四八）

綴之部

（一）学テ行ハサレハ器ヲ製シテ用井ザルカ如シ。学ハザルニ如ズ。行フテ過アルハ器ヲ用井テ損スルガ如シ。改ムレハ則チ復故ノ如シ。

（二）悪癖アルモノハ幼少ノ時ニ改メザレハ老ルニ従ヒ其癖モ亦長ズ。譬ハ崩生ノトキ曲レル木ニシテ其自成ニ任ズルトキハ長スルニ従ガヒ其曲リモ愈大ナルカ如シ。

（三）燭火明カナリト蚉蛍火ノ風ニ滅セサルニハ如サルナリ。人モ亦前後ヲ顧ミス漫リニ己ノ長ニ誇レハ及テ短キモノニ劣ルコトアリ。

(四) 山鴉・鶯声ヲ発スト虫衆鳥之ヲ恐レス・家豚・虎皮ヲ被ルト虫百獣之ヲ避ケス・禽獣猶然リ況ンヤ萬物ノ霊タル人ニシテ・外貌ヲ以テ・之ヲ欺ント欲ス・豈得ベケンヤ・

(五) 金魚ハ・其色美シト虽・食フベカラス・巧言令色ノモノハ・其負チオアルニ似タレ・軽ク交ルベカラス・其害ヲ受クルコト・少ナカラサレハナリ・

(六) 事ヲ行フテ・過ナキヲ欲セハ・未タ事ニ後ハサル初メニ於テ・吾ノ力能クヨヲ成スヘキヤ否ヤヲ熟考スベシ・モシ・堪ヘガタシト思ハヾ・初メヨリ之ヲ行フナカレ・中途ニシテ廢スルノ恐レアリ・

(七) 橋ノ低キヲ見テ・之ヲ侮リ・水ノ浅キヲ見テ・之ヲ軽ンズルハ・歩行ヲ謹マザルモノナリ・事ノ易キヲ見テ・之ヲ忽ニスルハ・品行ヲ顧ミザルモノナリ・

(八) 兎鳥去テ後チ其影ヲ留メス・流水截ラルヽト虽其痕ヲ残サス・凡テ既往ノ事ハ・幾回悔ユトモ・決シテ及ブナシ・故ニ・久シク心ヲ着セス・断然其念ヲ翻シ・更ニ後事ヲ計ルベシ・

(九) 水ハ柔カナリト虽・寒ニ逢ヘハ・凝テ氷トナリ・鐵ハ剛シト虽・熱ニ逢ヘハ・溶ケテ湯トナル・故ニ柔者ト虽・剛者ト虽・変ニ逢フニ及ンデハ・亦平日ヲ以テ論スベカラザルヿアリ・

(十) 人ヲ遇スルニハ・薄キニ過ルヨリ・寧ロ厚キニ過グベシ・厚

キニ過ルハ唯己ノ体ヲ役スルコト多キノミ薄キニ過レハ人ノ怨ヲ受ルコト多シ

(十一) 良種アリト雖培養セサレハ米粟ヲ収ムベカラス良木アリト雖斲削セザレハ柱梁ニ供スベカラズ資性英邁ノ人ト雖学ハサレハ亦事ヲ処シ功ヲ成シ難シ

(十二) 己ノ過ハ喜テ之ヲ聞クベク人ノ過ハ謹テ之ヲ言ナカレ斯ノ如クスレハ則チ己ノ行ヒ日ニ正クシテ人ノ憎ヲ受ルコトナカルベシ

(十三) 光陰ハ金銭ヲ以テ買フベカラズ威權ヲ以テ求ムベカラサル至重ノ寶ニシテ天ヨリ普ク衆人ニ賦與セラレタルモノナリ故ニ一刻ヲモ空シク過キス固ク之ヲ守テ失ハサレハ必ス貧窮ニ陥ル憂ナシ

(十四) 善事ハ終身之ヲ行フモ猶盡キス悪事ハ一日之ヲ行ヘハ既ニ餘アリ故ニ善事ハ積マサレハ顕ハレス悪事ハ一回之ヲ行ヘハ忽チ露ルヽモノナリ

(十五) 大酒ハ養生ニ害アルノミナラス内ハ心思ヲ乱シ外ハ行狀ヲ失ハシメ甚シキニ至リテハ害ヲ明友親戚ニ及ボスコトアリ宜ナル哉古人呼テ狂薬ト云ヘルヿ故ニ謹厚ノ人ハ大抵之ヲ嗜マズ

(十六) 諺ニ云雲ニ達シタル紙鳶モ絲ヲ絶テハ落ルトコレ人ニ

倘テ栄誉ヲ得ルモノヽ謂ニシテ人ノ鄙ム所ナリ人々宜シク自カラ昇ルヘキ實ヲ務メテ人ノ絲ヲ仰クナカレ

(十七) 人誤テ毒物ヲ食ハントス我知テ之ヲ告ゲザルハ人情ニアラサルナリ人自カラ事ノ法ニ違ヘルヲ知ラスシテ之ヲ行ハントス我知テ之ヲ告ケサルハ亦人情ニアラサルナリ

(十八) 書籍ハ因テ以テ事理ヲ知リ智識ヲ開ク所ノモノナレハ師ト同ク敬セザルベカラズ故ニ出納開閉ノ際或ハ汚シ或ハ破ル等ノコトアルベカラズ

(十九) 貴キモノモ人ナリ富ルモノモ人ナリ然レハ則チ人ニシテ其地位ニ至ル可ラサル理アランヤ唯幼時ヨリ学ニ勉メ其効ヲ積ムニアルノミ

(二十) 容貌ヲ以テ人ノ賢愚ヲ判チ難キコト猶花ヲ見テ樹ノ良否ヲ辨シガタキガ如シ直實ノ人ハ其負却テ素朴ニシテ外容ヲ務ムルモノハ大抵浮薄ノ人ナリ深ク察セサルベカラス

(廿一) 柔諛ノ人ニ交ルハ酒ヲ嗜ムガ如ク已ヲ歓ハシムルト虽遂ニ大害ヲ生スベシ剛直ノ人ニ交ルハ藥ヲ服スルガ如ク心ヲ喜バシメスト虽忽チ其効ヲ見ルベシ

(廿二) 門窓隙ナク鎖鑰堅クシテ其守リ厳ナルトキハ仮令黠

盜之ヲ抱サント欲スルモ得ベカラザルナリ言フ所過チナク行フ所度アリテ品行方正ナルトキハ奸人アリト雖之ヲ誘フニ由ナキナリ

(廿三) 士農工商ハ一トシテ天下ニ欠ク可ラサルモノニシテ豈彼此軽重ノ別アランヤ故ニ各其志ヲ変セス其職ヲ勵ムヘシコレ即チ國ニ奉シ家ヲ興シ身ヲ立ルノ道ナリ

(廿四) 資産ノ多少ハ家ノ大小ニ関セス智識ノ多少ハ力ノ強弱ニ因ラス故ニ家大ニカ強シト雖自カラ驕リ人ヲ凌クヘカラス遂ニハ大辱ヲ取ルコトアルヘシ

(廿五) 一葉ノ紙以ツテ百字ヲ学フヘク一寸ノ石筆以テ千言ヲ書スヘシ故ニ有用ノ品ハ瑣小ナリト雖必棄ツベカラス

(廿六) 人ト交ルニ同座ニハ人ヲ上ニシ同行ニハ己ヲ後ニシ善アレバ人ニ譲リ過アレバ己ニ帰ス斯ノ如クスレバ則チ其交リ久クシテ愈固ク間隙因テ生スルヿナカルヘシ

(廿七) 志ハ固ヨリ大ナランコトヲ要ス然身ノ分ト力ノ及フ処ヲ顧ス叨リニ高遠ニ趨ルトキハ其志ヲ達スル能ハサルノミナラス却テ之ヲ損スルコトアリ

(廿八) 知ラサルコトヲ知レルガ如クスルハ自カラ欺クノミナラス面アタリ人ヲ欺クナリコレ猾者ノ其学進マス常ニ人ニ信セラレサル所以ナリ故ニ苟モ知ラサルヿアラハ

明ニ之ヲ知ラストセヨ。コレ真ニ知レルナリ。

(廿九) 路傍ノ雑草ハ之ヲ踏過キテ顧ミサレトモ花ヲ開クトキハ之ヲ避ケ且ツ目ヲ注カサルモノナシ鄙野ニ成長シ常ニ人ノ侮リヲ受ルモノト虽学成リ智開クルトキハ孰カ之ヲ尊敬セサルモノアランヤ人々勉メヨヤ。

(三十) 人一タビ志ヲ立ルトキハ當ニ汽船ノ風ヲ凌ギ濤ヲ截リ直前撓マザルガ如クナル可ク楫ヲ失ヘル船ノ流ニ從ヒ漂々トシテ底止スル所ナキガ如クナラザルヘシ。

(三十一) 狐ハ毛属中ノ狡猾ニシテ且敏捷ナルモノナリ然モ一ノ灸鼠ノ為メニ圏ニ陷リ遂ニ人ノ獲ル処トナルコレ他ナシ食ヲ貪ル性アレバナリ故ニ智アリ能アルモノト虽飲食ヲ嗜ムトキハ間々大害ヲ招クコトアリ戒ムヘシ。

(三十二) 石炭化シテ紅粉トナスベク鉛礬化シテ白粉トナスベシ。世間豈教ヘテ化スベカラザル人アランヤ唯其法宜シキヲ得ルト得ザルトニアルノミ。

(三十三) 齒齦堅カラザルモノハ稍硬キ食物ハ避テ食セズ故ニ生涯真味ヲ知ル能ハズ膳ノ小ナル人ハ飽カニ難事アレハ憚テ近ヅカズ故ニ終身大事ヲ成スヿ能ハス古人云膳ハ大ナランヿヲ欲スト信ニ然リ。

(三十四) 大利アルモノハ必ス大損アリ故ニ人言ニ迷ヒ軽ク心ヲ

動サス、専ハラ、己ノ職業ヲ勤ムヘシ、仮令、大利ヲ得スト雖、大損ヲ招クヿ無シ、

(三十五)

牛歩遅シト雖、進デ止マサレハ、遂ニ千里ニ達スヘシ、馬走速カナリト雖、百里ニ至ラズシテ仆ル、凡ソ、事ヲナスハ、徐々怠ラサルヲ要ス、必速カニ成サントス欲スルナカレ、

(三十六)

日光ノ赫々タルモ、雲霧ニ蔽ハルヽヿアリ、鏡面ノ皎々タルモ、塵埃ニ汚サルヽヿアリ、故ニ、其言正シク、其行ヒ直ケレハ、仮令、一時、世ノ誹謗ヲ受ルヿアリト雖、何ソ憂フルニ足ンヤ、

(三十七)

草木花ヲ開ケハ、自カラ求メズト雖、蜂蝶之ヲ慕フテ、已マス、其香粉ヲ含メルヲ以テナリ、人モ亦然リ、学成リ、智開クルトキハ、自カラ招ムト雖、芳名四ニ聞エ、衆人ノ尊敬ヲ受クベキナリ、故ニ、其名ヲ求メス、其實ヲ務ムヘシ、

(三十八)

険路峻嶮ナラサレハ、艱苦甚シカラス、艱苦甚シカラサレハ、筋骨固キニ至ラサルヘシ、学成リ、事ヲ更ルモノヽ、心固クシテ、動カス、能ハサル所以ノモノハ、少年ノトキヨリ、難事ヲ厭ハス、能ク艱苦ニ堪ヘ、一ニ勉強ヲ以テ之ヲ鍛練セシ故ナリ、

(三十九)

遨惰安カラサレハ、内地、従テ疲弊シ、支族睦シカラサレハ、宗家、従テ、衰微ス、言順ナラス、行ヒ正シカラサレハ、心遂ニ、

乱ル、凡ソ、内ノ乱ルヽハ、外ヨリ来ラサルナシ、

四十 烏ノ食物ヲ銜ミ去ルヤ、浮雲ヲ標トシテ、之ヲ藏スルヲ以テ、母ニ、其標ヲ失ヒ、皆他烏ノ得ル所トナルト云ヘリ、其志固カラス、常ニ、人言ニ迷ヒ、屢、其業ヲ変スルモノハ、猶カノ烏ノ如ク、其利ハ、皆他人ノ得ル所トナル、嗚呼、亦タ愚ナラスヤ、

四十一 身体ノ健カナラサルハ、養生ノ至ラサルニ因ル、智識ノ開ケサルハ、勤学ノタラサルニ因ル、故ニ、養生ト、勤学ハ、賢愚、夭壽ノ分ルヽ所ニシテ、人ノ最モ意ヲ加ヘサルヘカラサルモノナリ、

四十二 世ニ子ヲ愛セサル父母ナシ、唯、子タルモノ、孝ノ至ラサル処アルヲ以テ、呵責ヲ受ルヿアルノミ、故ニ、父母ヲ怨マス、専ハラ、己ノ及ハサル処ヲ省ルヘシ、子タルモノ、其道ヲ尽セハ則チ、父母ノ愛ヲ得ルヤ必セリ、

四十三 貧産アル人ニシテ、凍餒ノモノヲ、恤マサルハ、汎術ヲ善スル人ニシテ、溺者ヲ救ハサルニ異ナラス、斯ノ如キモノハ、人ノ悪ミヲ受ルヿ多クシテ、己ノ幸福ヲ全フスルヿ能ハサルヘシ、

四十四 豺狼ノ猛烈ハ、百獣ヲ威スニ足リテ、之ヲ懐クルニ難シ、大象ノ寛大温順ニシテ、犬豕ト居ヲ同シクシ、一害ヲ加ヘサ

ルニ如サルナリ、故ニ、人ニ接スルニハ、宜シク大象ノ如クスベク、必豺狼ヲ学ブナカレ、

四十五

労苦アレハ、人ニ付シ、不利アレハ、人ニ與フ、コレ即チ、自ラ労苦ヲ求メ、不利ヲ招ク所以ナリ、古人云、天ヲ仰テ唾クハ、自カラ面ヲ汚ス所以ト、亦此ノ謂カ、

四十六

貪欲限リナク、唯利ヲ博スルニ汲々トシテ、廉恥ヲ知ラス、節義ヲ顧ミス、甚シキハ、人ノ生死ヲモ、顧サルモノアリ、之ヲ人面獣心ト謂フ、此ノ如キモノハ、必其利ヲ保ツヿ能ハス、却テ大不幸ニ陥ルヿアリ、恐レサルヘケンヤ、

四十七

山ニ登ルニ、其足健カニ、気強クシテ、険阻ヲ憚ラス、危路ヲ厭ハス、仰登シテ息ハサルモノ、最モ早ク、其巔ニ達スルヲ得ル、学ヲ為スニ、其志固ク、心専ラニシテ、寒暑ヲ厭ハス、晝夜ヲ分タス、勉働シテ止マサルモノ、最モ先キニ、其業ヲ卒ルヲ得ルナリ、

四十八

果實ノ落ルヲ見テ、引力ヲ発明シ、簷燈ノ動クヲ見テ、振時器ヲ発明シ、鑄汽ヲ見テ、蒸気カヲ発明セシ、類皆目前近接ノコトニ、因テ、遂ニ大業ヲ起シタルナリ、故ニ、人々日々対スル所ノモノニ於テ、能ク心ヲ留メ、軽々看過スルナカレ、

談話書取作文初歩二編 終

明治十四年六月三日出版々權御願
同　六月廿日版權免許
同　八月　日刻成

定價金九錢

編輯人　山口縣士族三吉艾
出版人　京都府下上京區第廿貳組錦砂町二百九十五番地寄留　遠藤平左衛門
出版人　京都府平民　藤井卯兵衛
下京區第五組朝倉町五百廿九番地
下京區第拾七組小泉町百壹番地